

〔本朝醫考〕中 宗桂

宗桂稱意安、以醫術大有聞、陳日華宋開寶年中撰諸家本草、能分寒溫辨性味、宗桂亦能辨知、倭藥故世人以日華子稱之、遂自以爲別號、天文八年伴入明使僧天龍寺策彥而赴大明、明人以宗桂之診治有神察、呼稱意安、蓋取醫者意也之義也、梅崖書稱意之二大字以贈焉、同十六年與使僧策彥再遊大明、于時獻藥於大明皇帝、著醫名於異域、而携方書歸本朝、爾後令名彌彰、自成一家、子孫世々以意安爲號、元龜三年十月二十日死、

〔皇國名醫傳後編〕上 長澤道壽 中山三柳

長澤道壽號柳菴、又丹陽坊賣藥山人 土佐人、受業於曲直瀬正紹、吉田宗恂、中 中歲仕織田公、無幾辭去家京師、

其學祖述素難折衷、李朱尤致精於藥品、大坂堺市藥鋪、至今稱藥之良者曰土佐用、

〔駿府政事錄〕慶長十六年九月二十二日、施藥院崇伯法印、自京都下著、則被召御前、宗哲法印、同有本草藥種之御雜談、

〔東照宮御實紀附錄〕二十二 醫藥本草の事なども、御心よせさせ玉へり、京都より、施藥院宗伯まかりしに、常に御前にめして、與安法印等と、物産の事ども御尋問あり、又ある時、光明朱を求められしに、いづれも下品なれば、吉田意安宗恂が父は、明國へ渡海しつれば、意安父が持來りし朱を獻りしに、御心にかなひ、さすが名家なり、かゝるものまで貯へたりと、御賞譽あり、この後は、海船に、これを證として購求せらる、又意安に、紫雪を製して奉らしむ、意安和劑局方に據りて、調して獻りしかば、是も御けしきにかなひ、此より衆醫みなこの製に倣ひて作るとなり、ある時、南船より、薄き石の一尺ばかりにして、側柏の如くなるを獻る、其形、木賊、柏葉の連なりしに似たれば、めづらししと思して、衆醫に問せ玉へども、知者なし、意安、こは瑪瑙の花なるべしと御答せしが、後に、本草綱目を檢點せしに、果して申所の如くにて在しとぞ、